認識における基本的な関係形式

岡　　不二太郎

I．課題

表題にいう〈認識〉の語は，所与の事物事象をその諸聯関の面から云うものであり，他方には，それらの事物事象を陳述（表現 re-present）する命題ないし命題組織をも指すものである。学問においていう〈法則〉や〈世界〉は言語表現の組織として存する。表現の成立は認識の〈真理性〉である。それゆえ，認識 Erkenntnis は真なる命題を意味し，〈誤謬 Irrtum〉の反対語である。古来，真理性 Wahrheit の条件として〝知性と事物との合致 adaequatio intellectus et rei〟が云われる。それは超経験的なる実在と知識（命題）との対応合致をも考えるものであるが，上にいう〈陳述〉は，現象界の事物事象に一義的に対応する命題を樹てることである。そして，実証的な学問における〈真理性〉の基準は，飽くまでも，命題がよく事実に対応することにある。誤謬も一つの事実であって，それも学問上に扱われる。すなわち，命題について〈誤謬〉なりとするのも〈認識〉である。

現象事物が認識の対象といわれ，また内容とも云われ，また〈認識〉の語で称されるのは，茶碗が知覚の対象と云われ，内容と云われ，〈知覚〉の語でも称されるのと同じである。一つの茶碗は，それを見かつそれに触れる人間との関係から，そのように云われる。〈認識〉や〈知覚〉は，そのような観点，心理学の立場から構成される── 心理学の── 分類概念で，〈認識〉は現象事物や命題を指す言葉ともなる。

表題にいう〈基本的〉は，一般的，普遍的，共通的，ということで，

根本的，基礎的，要素的，などの語も，実際上にはその類語である。本論が述べる〈基本的〉な形式は，現象事物およびそれを陳べる命題に見られる一般的な関係形式である。

〈関係形式〉は〈ものの関係のあり方〉,つながり，かかわり，の〈方（かた）〉で，型であり，形式である。関係は形式であるではないか，というならば，簡単に〈関係〉ないし〈形式〉の語でもよい。ただ，アリストテレス以来，〈形式 eidos，form〉の語は多様な語意や解釈を負うてきた概念でもあるゆえ，Beziehungsform(関係の形式)というような語が明快であろう。本論に述べる〈基本的な関係形式〉は，日常にも一般的な用語で語られ，概ね誤用もなく，実生活上の陳述や会話に流通する形式である。しかし，その説明ないし定義となれば,難題とも云え，哲学の諸説の中で多様な解釈がなされ,超経験的な意味も附されている。

哲学 philosophia はその語が示すように，本来は事物事象の原理に関する知識を意味するが，個別科学の発展以来，それと区別して万有の一般原理や認識原理の学を意味するようになっている。そのよう課題の性質は,一般性の強い，上位の類概念の定義と使用を要求する。それゆえ，哲学といわれる諸論には，類概念としての〈自我〉〈人間〉〈精神〉〈心〉〈意識〉〈物質〉〈生命〉〈意味〉〈もの〉〈こと〉などの語が用いられ，論ぜられ，論議の抽象性が云われる。しかし，それらの語は日常生活でも頻繁に口にされるものである。それでいて，その説明や定義となると，まことに多様となる。本論は，それらの語について，その概念の形式と素材 Stoff，Material という視点から，簡単に言及する。

上述の課題をめぐって，本論は哲学の古典的な問題にもかかわるが，各種の関係形式について，整序や精細よりは，大観を択ぶものである。さらに，それを以って，〈学問としての哲学〉はどのような形のものとして有りうるか，それを考量することを究極の関心とする。

Ⅱ．立場

〈明証的なる知識〉という見地からすれば，関係形式も端的な観察によって検討されねばならない。諸科学はその方法の独自，分類，概念や形式の設け方，観察手段，諸仮定の独自と，それによって劃され制限される対象領域の独自によって，特殊科学，個別科学と云われるが，本論は，それらの諸科学をも含めて，認識一般ないし所与の事物一般の関係形式を考察するもので，一つの全体学，普遍学の立場である。それは〈関係形式〉という面から事物事象や知識一般を考察する，ということで，それについて形式と質料（Stoff, Material）の区別を立てることを意味する。二者は一つの類別であって，事物事象や知識一般においては形式と質料とは不離相即のものである，また，質料と形式は〈もの〉と〈こと〉という言葉にほぼ相当するであろうが，〈もの〉は〈こと〉として存し，〈こと〉も亦，〈ことというもの〉である。そのような〈形式〉そして〈こと〉を，その直接所与の相において観察し，その諸相を論考するのが本論の立場である。それは関係形式を,〈有〉や〈無〉さらには〈よしあし〉〈真偽〉の如き価値判断をも含めて，素朴直截に観察し，云はば如実知見の対象として，平等に扱はんとするもので，明証の範囲内にとどまろうとする。

Ⅲ．基本的な関係形式

基本的と云える関係形式については，いろいろな区別と範囲があり得ようが，ここには次のようなものを挙げる。それらは常識的な意味においては比較的に単純かつ明快で，素朴未発展の認識においても一般的に存する関係形式というべく,むしろそれなしには,知識も云われないような関係形式である。そのように一般的な形式ではあるが，それを表わす各国語には，多少ともニュアンスの発展がある。

1． 否定関係，not，不，非： 明証性は判明 distinct ということで，判明は区別を意味し，区別は否定関係に依る。概念の相互否定関係，A：非A（例えば花：非花）は万物を二分し，中間はなく，非Aの否定は

Aである。肯定命題pと否定命題～pは何れかが成立すべく(排中律)，両立すべからざる関係にある（矛盾律）。この〈成立：不成立〉は〈真：偽〉である。論理学でいう真偽は経験陳述の真偽とは異って，矛盾命題に配分される相対的な価値形式である。否定の否定は〈肯定〉で，〈これは非Aに非ず〉は〈これはAである〉ということである（二重否定律)。経験認識における〈肯定〉は〈同一性〉の措定，同定を表現し，〈Aがある〉例えば〈花がある〉とは，花の〈存在〉の同定である。

二重否定律，排中律，矛盾律は，言語機能の基本形式で，思惟の原則とされ，〈もの〉〈質 quality〉〈存在〉〈非存在（無）〉が現成する場合の関係形式でもある。これらの相互否定形式，矛盾対立の関係，を排し或いは無いものとすれば，言語は経験陳述の機能を失い，思惟は成立せず，現象も不明たるべきものとなる。

事実の上での否定関係をいえば，光と闇の区別の如きもので，これは非同時,不俱戴天,の関係である。光と闇は一方を有とすれば他方はその無であり，非有である。光と闇の区別は〈質〉の区別でもあって，光は闇の否定で定義され，闇は光の否定で定義されるであろう。それが即ちまた〈もの〉の区別でもある。〈物の相違〉は〈質の相違〉によって云われる。そして〈有と無〉の区別も物の区別,質の区別と云える。存在（有）と非存在（無）は〈もの〉の区別でもあって,〈有る物〉〈無い物〉と〈物〉を区別する。区別は〈もの〉を樹てる形式である。〈形式〉も〈質料〉との区別としては〈もの〉であって〈形式というもの〉である。また〈もの〉は〈他のもの〉との区別において〈もの〉であり,その意味では〈あり方〉すなわち〈形式〉とも云える。

物と他の物との関係はoneとanotheroneの関係とも云われる。oneは数における1でもあるが,〈もの〉を指す不定代名詞にもなる。自然数を構成する方法の基礎としてウェーバー（Weber）が云うところは,〝単一の物に対して，〈多くの物〉という観念を構成する（精神の）能力，

およびこの多くのものを〈新たな単一の物（集合）〉と考える能力″，″〈一個の物〉又は〈物の或る一集合〉をすべての他の物から離して考える力″，そして″物を相互に結合し，対応させる力″である（米山国蔵,「数学の精神，思惟，方法」1968，P. 329f.）。数学を含めて論理科学は〈純粋に形式だけを扱う学〉といわれるが，数も〈物〉で，いろいろと事物に対応づけられ，事物は区別される限りにおいて計算されうる。

2. 有と無，Sein と Nichts（Nicht-sein）：〈有無〉を考えてみる材料として，旧約聖書，創世記の一節を引用してみる。″……（神の創られた）地は形なく，むなしく，やみが淵のおもてにあり，…… 神は‘光あれ’と言われた。すると光があった。神はその光をみて，良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ，やみを夜と名ずけられた。夕となり，また朝となった。第一日である″。このような世界，光と闇だけの世界においては，光を有とすれば闇は光の無である。また，闇を有とすれば光は闇の無である。そして，この二つの，一対の有と無は非同時，不俱戴天の関係である。その無の否定は有である。もし，次ぎに音を生ずれば，音と光の区別はまた互いを互いの無とすること，音に光なし，とし，光に音なし，とすることである。すなわち光と音の区別は，有無の形式に於てである。そして暗闇も〈もの〉，〈静寂即ち無音〉も〈もの〉で，その意味では〈無〉も亦〈有る〉と云われる。There is nothing, Es gibt nichts の表現がそれである。〈亡き人〉は〈いない〉ともされ,〈亡き人として有る〉ともされる。

〈ある〉とも〈ない〉とも，言えないようなものは言妄慮絶である。——″その始め無 Asat なく，有 Sat もなく，空もなく，またその上なる天もなかりき。死もなく，生もなく，夜と昼との区別なく，唯一なるもの Tad-ekam あって静かに呼吸し，他のものの存することなし″(リグ・ベーダ，10—10，129，有無讃歌 Nasad-sukta)。有無以前については言葉による定義以外には言詮できない。″これが有無以前である″と言える

ものは存しない。また，有のみあって無は存せず，考えられず（Parmenides）というのも，無を有の基礎や，母胎となすのも，共に不適当である。〈無形は物の太祖，無音は声の太宗〉(准南子）と云っても，物の無が物の有を生むのでなく，創造するのでもない。それは形以前に形なく，音以前に音なし，という事実の寓話的な表現でしかない。無や有について，その何れかを万象の根源また根本性質の如く云うのも偏頗である。事物が無化するのは事物の通則で，それゆえに事物の本性は無である，と云う場合，その〈本性〉は〈普遍共通の性質〉を意味するのみ。事物は生住異滅を示す。即ち，有化し，無化する。その有無は何れも現実であるが，有無はそれぞれの観点から云うことで,夢の中の出来事,記憶や予想の内容,推察ごと,は有か無か,という問いには,そのまま一義的な答えを期待し得ない。ただ，実証性を真偽の基準とする知識の立場からは，事物はその同定において有であり,同定は現在におけるものであるから，現在を超えたものは，現在における無（いもの）とされ，その無は,〈有ったもの〉〈未生の有〉〈同定のあり得ないもの〉などを意味する。そして〈もの〉というだけの同定でもひとは〈有〉という。〈何ものか(etwas）がある〉である。ものの無も同定される，という意味では，〈無〉もあることになる。かくて,〈無〉にも，いろいろの無が区別されねばならない。

3. 差別と同一,類別と同類，different と same，個別と同一個体：否定の形式に加えて〈差別と同一〉の形式が存する。差別＝不同一，同一＝無差別。事物の区別は種差 differentia specifica となす質の有無による。若干の種差によって動物と植物は別の類とされ，種差以外の質の同一によって，二者は同類である。一つの類は，更に種差によって下位類に分けられる。〈無〉を含めた万物について〈有〉や〈もの〉を云えば，〈有〉や〈もの〉が最高の類となる。個体と種，種と類の，分類上の順序を恰かも〈もの〉の存在の原理上の秩序と考え，最上の類を万物

の基礎や根源の如く云うのが，普遍主義の哲学で，普遍と特殊（下位の類または個体）の関係を産出あるいは支配の関係の如く考える。〈法，law〉は類型であるが，法また法則が万物の発生因また主宰者であるかに考えるのも，同趣の錯誤である。

〈同一〉の形式は〈類〉の概念および〈個体 individual〉の概念に必要な形式である。〈個体〉の概念は，事物に関してその時間的先後の間に同一性の形式を立てることを意味する。固有名詞をもって指される〈もの，物また者〉がそれである。空の星は昨日見た星と同一，一体，のものとされ，個人は時間的に不異の同一体，一者とされる。穴からネズミが出るのを続いて二度観察すれば，それは一匹のネズミとも考えられる。輪廻は一つの生命が他の個体の生命となって同一体をなすという考え方である。一つの癖，一つの考えの〈出没〉や〈潜在化と顕在化〉は，それらの癖や考えの持続的な存在，個体的一者，を 措定するものである。〈潜在意識〉もそれである。

4. 類似，similar ： 二つの事物の間の部分的な同一と相違。ただし，類似は類同を強調する形式。〈相異〉を強調するには〈まがう〉〈紛らわしい〉〈似而非〉と云うであろう。強調のこの相違は言明の目的の相違である。しかし，部分的な同異は，事物間の関係としてある。

5. 良し悪し，good と bad ： 〈価値〉といわれる区別。一般には〈良い〉を価値と称する。〈良い〉は事物事象についての許容や選びとりを云い，〈悪い〉はその反對。価値の区別なくば，価値の〈無記〉。〈良し悪し〉は，自然，宗教，芸術，道徳，知識，社会事情，個人の生活，その他百般の事柄についての形式で，それに伴う感情は価値感情といわれる。価値の如何は，取捨や選択の面からいう，事物の性質で，行為の目標や取捨の基準次第の区別であるが，〈良い〉とされる二つの事物事象についても，更に〈良し悪し〉の区別が云われ，〈悪い〉とされる事物事象についても，同様である（betterとworse）。事実としての〈良し悪し〉は，

また〈質〉でもあるが，現在性が基準で，過去・未来の事物の良し悪しは，〈良かった〉〈良さそう〉ということ，またその表象についての現在の価値判断である。事物における価値の時間的持続は仮想である。宗教，芸術，道徳，知識などの区別は，定義次第の分類で，境界不明かつ交錯するとも云えるが，それらの価値ないし〈良さ〉について，それらの区分に従って，聖，美，善，真，などの名で質が区別される。〈良さ〉〈価値〉の分類である。価値は更に多様に区別され，表現される。

〈真true〉や〈まこと〉〈正しい〉は〈良さ〉で，まことの宗教，まことの芸術，など云われるが，〈真（偽）〉も学問上の価値に限らず云われる。学問上には〈真(理) truth, Wahrheit〉は，命題が事物を〈良く〉表現することで，〈偽〉はそれと反対に陳述の不成立のこと。成否の区別は形式で，陳述が10%の成立でも,真の程度なるがゆえに真と云われ，10%の不成立でも，偽の程度なるが故に偽とされて，法則は蓋然性の命題でもある。〝真理とは最も合目的性の度合高き誤謬である〟(H. Vaihinger：Die Philosophie des Als Ob, 1924, S. 115) もこの事情を意味する点で正しくはあるが，敢えて誤謬と云わずに〝それぞれの程度における真理である〟と云えばよい事情である。真理と誤謬を互いの反対語とすれば，不適当な表現でもある。

論理学上の真とは，推理がその規範すなわち〈公理に従っている〉ことで，公理の成立の条件はその内部に矛盾が含まれないこと，即ち，その言語の定義が破綻しないことである。――〝論理学的に真であるということは，ある命題結合が，特定の無矛盾の論理規則に従っている（normgemäss）ことである〟(V. Kraft：Mathematik, Logik u. Erfahrung, 1970)。

6． 対応，対立，対比，to each other, paired, gegenüuber：事象Aと非A(B)を〈対〉とする形式。概念上には一組みをなす形式で，因果や真偽もそれ，尾根と谷，親子，夫婦，などは，互いに一方が他方を概念

的に規定する。それらは，互いの量とは関係なく，一夫多妻も夫婦という対合である。算術の演算は，二つの数のそれぞれの要素１つずつを互いに対応づけることである。

7. 度合，grade，quantity，大小，強弱，濃淡など，more と less ：二つの事物について,同じ質や機能を対応させたときの関係で,程度。数で云えば，数量の度。一つの色の濃淡の不一致，差異は，明るさの相違暗さの相違で，一方の質や機能を〝もっと加え〟あるいは〝もっと減ずれ〟ば，互いに等しくなる，という関係である。

8. 併立，共存，and，coexistence ： 二つ以上の諸事情A，B …の共存。時間的な共存には限らず，超時間的にも云う関係。

9. 選立or，選択either-or，択一alternative：二つ以上の諸事情の中から一つだけ，或いは一部分が係わるような関係。生まれるのは雄か雌か，または更に，というような形式である。〈か〉〈または〉の語はそのような関係を指す。記号論理学（ヒルベルト）の〈選立〉は p と q の両命題のいずれかが真で，また両方が真であってもいい命題結合形式である。言葉の語意はいろいろ有り得ようが，事物事象には，〈少くとも何れかが起る〉というような形式の場合がある。

10. 順序，seqence，next，after，before，from，through, by etc. ： AからB。部屋の中の明と闇は非同時で順序があろう。順序数の構成の形式は１に始まる時間的な先後の順序としても心理学的に説明される。自然数の順序はいろいろに配列されうる。順序は時間的な先後とは限らない。順序の種類は多様でありうる。論理にも順序がある。

11. 変化，change，vary，kinesis，exchange ：換える,代る,替る,移るなど。A から非A，有化，無化，転化，交替，入れ替り，多様性。変化は〈時間〉の形式の基礎。物理学的時間は天体の変位に據り，心理現象の推移，生理学的経過，歴史の転変は，またそれぞれの〈時間〉をなすともいえる。――〝意識のある限り時間感覚は常に存するゆえ，時間

は当然，意識を伴う生理的消耗と関係し，注意の活動は時間として感ぜられる，と考えられそうである。時間は，気を張れば長く，楽な仕事では短く感ぜられる。ぼんやりした状態で四囲を殆ど構わぬ時には，時間はたちまち流れ去る"(E. Mach: Analyse der Empfindungen, 9. A., S. 204)。但し，これは生理心理学的な解釈〈時間〉である。

12. 和，和合，一体，unification, class ： 和は and。A＋B＋C …が一者ともされ,〈他〉と区別される。機械は部品の一集合。万物は相関一体とも云えるが，いろいろの和合一体者に分けられる。事物これである。事物の区分は，知識の立場の相異に従って多様となる。諸科学の概念要素は諸科学が独自に設けうる。自然数の系列は１と他の１との和，その集合と新しい他の１，新しい和，の形で，定義され，自然数の関係（加減乗除）から，数の階級が発展的に構成される。

13. 所属，一者とその要素，属性, oneness とその belongings：所与の法則的な関係から，各種の〈一体者〉の概念が作られる。この一体者は他の事物事象とも関係する。一体者に規則的に関聯する一切は，その性質と云われる。一体者の特徴要素をなす事物事象はその〈属性 attribute〉と云われる。属性と考え得る範囲は広狭さまざまで有りうる。

14. 参加と脱落，join to, add to, fall out ： 〈もの〉の部分的変化。要素として加わる，抜ける，など。物体について許りでない，一般的な変化の一形式。

15. 条件関係，conditional relation, 理由と帰結：con = cum (lat.), together with. dit：√dicere (lat.) = speak, conditio の原義は〈申し合わせ〉，合点。条件関係は〈ならば〉でいわれる関係形式，理由と帰結。〝太郎が次郎の兄であるならば，次郎は太郎の弟である〟（次郎は女性でないとして),は〈兄弟〉の語意の定義に依る論理的関係。〝全部（一集合）がP であるのならば，部分（集合の要素）もP であるはず〟は〈全部 a class〉と〈部分 member〉の定義からくる論理的な関係で，ア

リストテレスの論理学はAllとsome の関係を扱うもの。ヒルベルトの記号論理学は，否定 nonと命題の真理値（真と偽），及び，and, or, implication（包含），equivalence（等値）の文章結合形式，について，それぞれの相互規定を定義し，文章結合の諸形式を互いに他の形式に転換できる公理から成る。〝如何なる論理体系にせよ，その全体を貫く原則は，即ち，その全体を統制する原則 regulative principle と云えるものは，無矛盾の〈文章結合形式〉を与えよということである〟（B. Russell）。一つの論理体系の成立がその〈無矛盾性〉を条件とする，ということはその体系の公理による推論，命題転換が，公理に矛盾をきたさしめず，その諸概念の定義の一義性をよく保たしめる，ということである。

現象事物は他の事物との条件関係において言明されうる。それは特定の関係形式を二者の間に措定することによる。A の次ぎにB が来る，と措定すれば，〝A があるならば，次ぎにB が来る〟ことになる。ただし〝A とB との継続には，未知の要因があるかも知れぬ〟というならば，〝……B が来るかも知れない〟ということになる。いずれにもせよ，理由たる命題で陳述される事情は〈因または原因cause〉，帰結の命題が陳述する事情は〈結果effect〉といわれる。〈原因〉の語は，一般には先行因の場合に限られもする。しかし，同時因でも論理的な形式に於ては同じである。佛典にいうような〝三つの芦の束が相倚って立つ〟場合に，全体の束またその中の一つが立っている原因（また条件）は他の束にもあって，この関係は芦の束のどれについても云える。すなわち，束は互に因となり果となって立っていることになる。この相互的な因果（条件関係）は同時的因果の相依相俟である。同時的にせよ異時的にせよ，有機的な存在，生物や社会，が無盡の質料の循環的な依存関係において成り立っていることは明白である。

ミルの帰納法の形式は，一つの事情には一つの原因事情，というような考えのもので，二つの現象事情の間における原因—結果の法則関係を

求め，それを帰納するものであるが，それは，時間的な前後関係とはかかわりがない。〝因果律は反復される現象相互の〈関係〉を言い表わしたものである。因果律の言い表わしにおいて，特に時間および空間を強調する必要はない。なぜならば，空間および時間の関係はすべて，現象相互の（知覚的な）関係から決められるものだからである〟（E．マッハ，「力学の発達」青木訳)。また，原因と結果の間の時間については何の制限もない。原因Aと結果Bとの間に，さらに因果の連鎖が観察されても，AとBとが因果関係をなすということに変りはない。また，原因のほかになお複数の原因があっても差支えない。原因を〈主因〉と〈副因〉に区別する形式があるわけでない。それは関心や実用による決定でしかない。古来，因と果が二つの〈もの〉の間の独立の繋がりの如く云われてきて，それがためにヒュームは，原因と結果の間には紐 band はない，と強調した。

生理学者，M.フェルボルンの複合制約説 Konditionismus は，〈因果〉の概念を排して，科学の研究は条件関係の探索で，かつ，現象事物の発生の条件は無数にある，と強調する。――〝たった一つの因子に依存している，というような状態や出来ごとは世に存しない。常に多数の因子がそれを決定するのである。炭酸ソーダに塩酸をかければ炭酸ガスが生ずる。その発生の原因と云っていいものは何か？ 塩酸とか炭酸ソーダとかであるか？事実，この二つは必要な条件（をなしたの）である。しかし，炭酸ガス発生の成立に必要な条件は他にもまだある。例えば，水であり，或いは温度であり，一定の気圧である。これらの諸条件が揃わねば，炭酸ガスは発生しない。これらの諸条件は（炭酸ガスの発生には）みな同じ価値のものである。みな必要だからである。他の条件より必要だという条件がある訳でない〟。

続いて曰く〝他の出来ごと，状態でも万事，同様のことが云える。ひとが確定しうるものは，ただ，それらが依存する諸条件以外のものでは

ない。一つの〈原因〉など云えるものでない。それ故に単数の一つの原因を語るようなことは諦められてきたし，〈原因〉という概念は或る事象を決定する因子群の総体を指すのに用いられている訳である。そうなればまた〈原因〉という概念は融解消滅してしまうことになる。条件 Bedingung という概念と同一のものになるからである″（M. Verwon: Allg. Physiologie, 7. A., 1922, S. 35ff.）。フェルボルンは科学研究について，〝どんな領域であろうと，事物事象の依存関係中に規則性を発見することに他ならず″，〝或る出来ごとが依存している諸条件の総体が解れば，それはその状態ないし出来事が科学的に認識された，ということである″という。その主張は正当とも云えようが，それは科学知識の妥当性の限界も示唆する。

現象の条件関係とは，事物事象AとBとの間における〈ならば〉の関係である。AとBとの間に共存か継起ないし共変 concomitant variation の規則性があれば，一方の事情が他方の事情（の存在，先行や継起，生住異滅）を推定させる。それは〈象徴〉の関係でもある。一般にいう原因—結果の関係も，この共変，生住異滅などに関するAとBとの間の対応関係であり，また然る形式を立てる想定 Annahme である。科学が現象の条件関係を研究する，ということの実際はこの如きことである。

なお，物理学の実験装置は，外部の事情による変化を排除し，内部の諸状況を能うる限り一定不変にして，目的とする現象関係だけを観察しようとするものである。しかし，それは徹底し難い期待である。装置そのものは，外部環境に対して完全な閉鎖系をなすものではあり得ない。また，変化する現象について，それと関聯する事情が探求されるが，変化しない事情については，無変化が何と関聯するかを探求し尽せない。それゆえ，フェルボルンの云う〈現象の諸条件の総体〉は実際には不明のものである。また，観測値は統計的な処置と概括的な修正によって命題の形を可能にし，得られた法則性の命題は諸他の法則との整合によって

科学の体系に摂取される。このような事情から，H．ポアンカレは〝科学はその法則の措定や現象への適用，現象の予測，に際して，某々の条件が満足せられるならば，多分，某々の現象が起るならむ，といい得るに止まる〟と結論する（H. Poincaré,「科学の価値」11章）。現象の条件として語り得る諸事情，諸聯関の複雑多様性，その範囲の無限性，環境条件の不可逆な推移，そして事物の質の不安定や不均一，を思えば，経験法則なるものは，所詮，その蓋然性を免れ得ない。

しかし乍ら，以上の事由から，法則は観念的な人為にすぎず，となすのは適切を欠いている。蓋然性の程度がどうであれ，法則の命題が陳べる現象関係の形式は，現象そのものの持つ形式の陳述なのである。現象事物は，その観察される様相においての他には存しないからである。

なお，法政における〈責任〉の概念も，〈原因 aitia〉の概念に繋がっている。〈人格責任〉の思考は，個人の特定の言動が外部事情や生理的あるいは心理的事情から自由である，という形式を要請する。本より，そのような〈自由〉の形式の適用が是とされる範囲内でのことである。複合制約説的な思考は，人間についての弁解や弁護に援用される。それは，個人の責任，個人の原因性，を稀釈もする。個人の功績についても同様であろう。

16． 相互作用，interaction, Wechselwirkung ： 事象AとBについて云われる条件関係，を逆にBとAとの間にも樹てる形式。〝人が時代をつくり，時代が人を作る〟など。この〈作用〉を〈活動〉のように考えるのは擬人観である。

Ⅳ．若干の一般的な概念について

以上，認識に関して主たる形式を羅列したが，他を略する。以下には更に，実証学的な観察という見地から，哲学において洽く扱われる若干の概念について言及する。それらの多くは，哲学の諸論において，経験的な意味を超えた，思弁的な解釈を以って用いられている。それは哲学

思想の実証性を損じ，他方には，似而非なる学問課題を生むことにもなる。

1. 能動的，active： これは文章論的な事柄に属する形式。〈能動〉は事象AとBとの間の，生住異滅に関する論理的な依存関係，機能関係（functional relation, 関数関係）である。それはAを主格（subject, 主語），BをAの対象（object, 客項，目的）として表現する場合である。AがBを変える，Bを在らしめる，Bの事情を決定する，などの命題形式で，他動詞を用うる。

働き，機能，作用，加工，産出，創り出し，などの概念は，現象事物の間の条件関係，その意味の依存関係を意味するが，それは〈活動〉〈力〉〈能力〉などの概念で説明されている。大工の活動は家を作り上げ，四肢体躯の運動，その筋肉の変動は石を動かし，鶏は卵を産出する。同じく，筋肉の感覚が変化しつつ，把握した物体は静止を続け，また，運動するが，腕から物体の状態を左右する要因を発して，その様な結果が生ずる，という思考が〈力〉の一般概念を作る。〈力を出す〉〈力が抜ける〉〈力がない〉などという。それは腕の状態と物体の状態との関係を表現する。そのような〈力〉の概念が，洽く現象事情に適用される。

部屋の〈収容力〉とは，広さが収容人員を決定し，制限し，或は可能にする，という論理的な形式をいう。〈能力〉は〈効率 efficiency〉について云うもので，仕事の量や質が人や機械などの事情に依存，という形式で表現する場合の，要因の概念である。〈抵抗力〉は，生物や物体や精神が，よく自存して，他から影響されない場合に，その理由を当の生物や物体，また精神に帰する要因の概念である。病気に罹らず，また，病気が回復すれば〈抵抗力〉をいう。古来，〈精神の活動〉〈心の働き〉が労作，産出や加工の作業に擬して言われるが，擬人観と評すべきである。

2. 受動的，passive： 〈能動〉の構文の概念形式を逆転した文章形式。Aに依存となす〈Bの状態また変化〉について，主語と客語を逆転し，

主語（subject, 主格，主題)として表現する場合，またその動詞の形式。〈A がB を変える〉→〈B がA によって変えられる〉。

3. 自動的，自発的，self-acting, spontaneous, automatic, selbsttätig： 主語が指す事情の〈状態また変化〉を単にその事情に附加し,〈制約〉や〈依存〉の形式をとらぬ形式。〈A がある〉〈A が動く〉など，A の自発の状態とされる。本より，しかる思考形態であって,その事情は〈存在させられている〉〈動かされる〉となす形式を禁ずるものではない。一つの事情は国語が違えば他動詞で或いは自動詞で表現される。動くを〈sich bewegen自分を動かす〉，生ずる，を〈sich ereignen 自身を生ぜしめる〉など。一つの事情を〈傷ついた〉といい〈傷つけられた〉という。〈自由に考える〉〈自由に行動する〉と表現される事情は，〈ひとりでに考えさせられる〉〈そう行動させられる〉といってもいい。〈自由〉は〈自律〉のこととともされる。語意は〈他の事情，また，環境事情からの自由 free from〉で，他のものの影響による状況ではないこと,であるが，一つの思考形式であって〈他の事情による影響〉という思考を不可能だとすることではない。人格の〈他律性〉も学問課題である。

能動，受動，自動，は一つの事態について適用が可能な，異る表現形式に他ならない。〈食べる〉のは能動か，自動か，受動か，答えは自由である。〈花を見る〉際には，花はあり，見る私はあり，両者の共存も確かめ得る。そして，花を〈見る〉〈見受ける〉〈目にする〉〈見させられる〉〈花が目に入る〉〈眼につく〉また〈私に花が見える〉など，能動，受動，自動，のいずれの形式もとられる。その何れかが本当で,他は表現の技巧である，といえるものでない。万物が，行動も思想も感情も，一切が自ずと生じ，自ずと住し，自ずと変り，自ずと滅す，ということも，最も素直おな観察の一つで，そして表現である。〈受用三昧〉は能動か受動か，と問うことは無益である。能動と受動が事物や事情の性質でないことは，ときには指摘されている。

〝能動者が原因で受動者が結果である，との考へが普通になされるが，よく調べてみれば両者の間に区別はない。……（そのような）区別は根本的にはないものである。……外界の物を知覚するに，知覚者が原因なのか，知覚物が原因なのか。考え方次第でどちらもが能動者と見られ，また受動者と見られる。そこで，能動者受動者というのはほんのそのときの見方次第のものであって，本質的のものではない〟（永野芳夫,「論理学概論」大正10．324頁以下）。

4. 主観，subject ： 意識心理学は，事物事象を自我と一如相即の相について観察する。即ち事物事象を各人の〈自我の意識内容〉として意味ずける。そこで扱われる現象は何某個人の意識内容で，誰にも属しないような現象ではありえない。即ちその立場は〈I think…〉という見地からの省察である。そこでは〈人間〉そして〈自我〉は〈思う者〉，すなわち，見る者，聞く者，感ずる者，知覚する者，認識する者で，見聞思識の主体，主格 subjectであることになる。そして万象は，感覚，知覚，感情，認識，思考などに分類される。意志や注意の概念も，それらの概念で定義される。〈認識〉という概念も，事物事象をその諸関係の面でまた，思考をその関係形式の面で，心理学の立場からいうものである。それらは，自我との不離相即，また，自我の事情に依存するという面から，〈私の認識〉と云われる。

5. 意識，consciousness, awareness, Bewusstsein： 自我（自分）と現象事物とが共存している事態で，それの認識。ゆえに自覚のこと。〝我思うは総ゆる経験に伴われうる〟とカントは記した。恍惚として花を眺めて忘我，仕事に熱中して無我，その他，無我夢中の活躍もある。しかし，我れに帰れば，我れと対境は共存相即である。〈自分が字を書いている〉ことを知っていて書いているのは，〈意識して〉即ち〈自分をそれとして知りながら〉書いていることである。〈私が何をするかを知っていてする〉のを〈意識して mit Bewusst する〉という。ゆえに〈意

識〉は自我に関する一つの〈認識〉〈認識内容〉である。〈私が……を見る〉〈…を知る〉〈…を感ずる〉という見聞思識の事態は，〈私が私について認識している状態〉即ち，私における〈意識状態〉で，その事情から〈気ずき awareness. I am aware of……〉が意識を説明する。

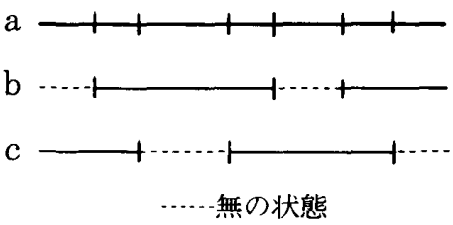
この〈意識〉の関係，自分と万物との一如相即の観点から，心理学にいう〈心〉や〈精神〉は経験的に定義され，経験的に使用されうる。この関係からすれば，万物は〈自我の意識内容〉で,〈心の現象〉〈精神現象〉の意味を持つことになる。〈物質〉は〈精神〉や〈意識〉とは定義の観点，質料と形式の用いかた，を異にするもので，その意味では異質である。しかし，物質も心理学の立場からすれば，〈知覚〉ないし〈認識〉で，ゆえにまた〈精神現象〉である。心理学の見地からは，万物は自我との関係からは〈心的 mental, beseelt〉であって，〈物質〉といわれるものも，心的という性質を持っていることになる。〈知覚また認識〉と称さるべきものだからである。花瓶を物質と称し，知覚と称するのは，云はば，記号系の相違である。その〈知覚〉は花瓶の示す心理学的性質である。同様な様式を以って，万物，森羅万象は生物学の見地からは生命現象で，生物の個体や種に独得なものである。

6. 目的，aim, end, Zweck, Ziel ：事情Aが事情Bに先行し，二者の継起について，事情BをAの因となす形式。事情Bは古来,〈目的因 final cause〉といわれる。〈アリが餌を巣に搬ぶのは越冬のため〉という命題形式で蟻の行動を陳述すれば，アリの行動，餌搬びの〈原因 cause〉は〈来る冬の生活〉である。それは〈アリは餌を巣に搬んで冬を越す〉という現象の,異る表現であり.思考形式である。それは，アリが何を考えて行動しているか，という問題とは関係がない。〈恋愛は種族保存のための行動である〉といえば，種族保存が〈目的因〉である。生物学の見地は，その命題意味，思考形式，を容認する。それは〈異性愛が人類を保存する〉事情についての異る表現である。ただ〈目的因〉は先立つ事

情Aが迂余曲折の変化を示しても,特定の事情Bがその結果をなす,というような法則関係である。穴から出たネズミが室内を徘徊し,一連の多様な行為を続け,水を飲むと徘徊がとまり,一直線に穴に戻ったとする。穴から出てきて徘徊したのは,〈水を飲むため〉であったかと，ひとは考える。これはB．ラッセルが〈意志〉の概念の説明に用いた例である。意識心理学は，ネズミの意識内容としての〈志向〉がネズミを行動させたと考え，行動科学的心理学は，ネズミの意識などは，ネズミの脳内過程の随伴現象で二次的な現象である，とするかも知れぬ。また，その水をさがす脳過程は，遺伝的な仕組に基く学習効果と考えてもよい。〈目的因〉の考えは，そのような思考法と相争う必要のない，別個の認識形式，時間的に後なる事情を先だつ事情の因となす形式である。

ただ，〈生きる〉という概念は，目的論的な形式を離れないものである。生物学が生物の特色とする榮養，生殖，防禦，代償，適応(健康)，自己保存，種族保存，などの概念は，〈生きるため〉という視点に収斂する。それは，生命現象の物理化学的な解明を妨げるものではない。

7. 持続，duration,と連続 continuity：時間的にか空間的にか,一つの事物の存在をいくらでも分割しうる,となす形式。事象Aの〈持続〉の実地概念は,それに他の事情の有化と無化を対合させる場合を考えてみれば良い。左図のaを青空，bをブザーの断続音，cを鳥の声とする。b，c，は，体験の現在の中で，aと共存したり，しなかったりする。b，cの有化，無化は，それによって，青空aの存在を分割する。このようにして，青空が前後無数に分割されうると考えれば，青空の前後不変，持続の形式を樹てうる。空間の〈拡り〉は,物体の変位の順序a，b，c，d,を逆に逐うて，d，c，b，aの順序を前者と同一事情のもの，となすことである。未知の山を越え，翌日また歩き始めて,途中で次ぎ次ぎに昨日と同じものを見る時,



一つの配列を順序を逆にして見たものとすることになろう。時間は不可逆的で，空間は可逆的である。空間の連続性は，それを任意に，いくらでも分割しうる，となす形式である。

8. 物体，body, Körper ： 拡がり，不可入 impenetrable，重量，慣性などが，古来,〈物体〉の概念規定に用いられる。重量や不可入性は，筋覚,触覚の事情である。〈物体〉をいう一般形式は，触覚と筋肉運動の感覚との結合の形式から発展しうる。四肢の屈伸は多様の内部感覚や触感を伴い,両者の変動は相関の規則性を示す。物体の概念には視覚を要しない。いま視覚がない場合を考える。目覚まし時計を手にし，指で触れ，指，手，腕，を動かせば，筋覚の変動と共に時計の触感も変動する。そこには順序の規則性がある。時計を左手に持ち，反対の手を運動させれば，時計に触れて，両手に触感を生ずる。手で時計を廻し，多方向に回転して，諸関節を屈伸して，その運動と触感から，時計の表面について，多次元の拡り，という形式を得る。更に両手の間の運動巨離という形式を得る。時計の触感なくして運動の感覚のみある状態は,〈空虚なる空間〉の概念を可能にし，それを時計とは別の，時計がその中を移動するもの，と考えさせる。〈位置〉の概念である。そのような〈拡り〉と〈位置〉の形式は，全身体の運動，またそれによる他の触感，例えば机，壁，などと結合しうる。かくして〈物体〉は特定の感覚の規則的結合である。

触空間，運動空間は，視覚と結合して，視空間の概念が発展しうる。色は物体の表面に定位して，物体また拡りの形式と結合し，遠覚的空間の質料となる。物指しなどの測定具はこれらの感覚の綜合として存する。ユークリッド幾何学の点・直線・平面の定義は測定具の製法の形式でもある。その用い方は経験的幾何学の基礎であり，空間を三次元として扱うことは最も簡便な形式である。物理学の空間と時間は互に不離な関係にある。二者の数量化は，互いに他を必要とするからである。天文学的時間は星の変位，空間的移動を,空間の測定は物さしの移動を，そして移

動には時間を要する。

9. 個体，individual ： 一つの〈もの〉について時間的な不変同一をいう形式。意識の現在において,眼の前にアリが匐うのを眺めれば,一匹のアリの時間的な持続という形式は，確認されうる。ネズミが穴から頭を出し，それが三回続いて見られれば，それは三匹のネズミでもあろうし，また,一匹のネズミの出没という形式でも考えられる。〈一つの物〉の時間的持続，時間の次元における同一者，という認識は,〈部分的な同一不変を措定し続けうる〉という形式による。それは卵から胚子への持続的な変形，ヒヨコを経て親ドリ，という前後の間に，細やかに同一不異の関係を措定することによる。自我，一つの生物，種，人類，生物界，宇宙はそのような〈時間的持続者〉となせば，〈個体〉である。人は，〈生命概念の進化史〉をいい，〈綿々と続く伝統〉，〈生命の輪廻〉〈記憶の持続〉〈宿業〉〈種子薫習〉〈不死〉〈遺伝子〉など，〈個的なものの持続的存在〉を考える。

10. 発展，development ： 持続的な一者の変化をいう形式。価値の観点から〈発展〉といい〈退化〉という。人類文化の発展を〈退化〉といい，器官の退化を〈発展〉ということも，観点次第のことである。

11. 普遍，the universal：集合 class の概念。区別されたるものについて質の同一を云う形式，各箇の〈もの〉〈こと〉〈岩石〉〈生物〉〈国家〉〈文化〉など。〈猫というもの，a cat〉。〈動物というもの〉〈形式というもの〉など。事物事象は，相互の間に共通の質あれば，それを以って，同類とされる。即ち〈もの〉であり〈法〉であり〈意識内容〉であり，〈存在〉である。また沢山の類に分けられる。名称は類を代理象徴する。それは声やトサカがニワトリを象徴し，代理（re-present，表現）するのと同じである。名称は感覚与件であるが，その語られる前後の間において〈同一不変〉のもので，それゆえに事物を代理できる。すなわち言葉は〈普遍〉の性質を持つことによって機能する。〈普遍〉の存在を

否定する意味の唯名論はなり立たない。ゲシタルト，パターン，典型などは普遍の例といえる。

12. 意味，meaning, implication, signification, sense, Bedeutung ：

mean は心の向き，implication は含み，sense：√sentir (lat.) は向き，おもむき（趣き），考えつき，など。意味は〈考えのつながり〉，表象の移り。〈言葉の意味〉は言葉につながる諸事象。生は死を，骸骨は動物を，意味する――象徴の関係。価値も意味の一つになる。〈人生の意味〉は人生につながる事象，出来事，価値など。〈意味がない〉は〈価値ある関聯事物がない〉こと。〈世界〉とは一つの〈意味構造〉であるとは，〈事物の関聯の組織〉であるということ。現象の法則性の認識は，現象の意味，象徴関係，をいうことになる。

13. 法則，law, regularity, Gesetzlichkeit ： 事物の関係の類型，タイプ，反復する不変の関係。現象関係の一様性，uniformity。確率の低い関係でも，それなりの確率の法則性である。

14. 必然性，necessity ： 法則の命題からみた事物事象の生住異滅。他の在り方（形式）の否定。〝石は落下する〟という〈規則性〉を措定すれば，〈この石の落下は必然的なる現象〉。論理的必然性は，論理規則，定義に従って命題転換が生ずること，論理規則に適っていること。

15. 概念，concept, Begriff ： 一つの〈事物〉の概念とは，その事物に関聯する表象の総体。事物は各様の関係形式において多様な事物とつながる。言葉もそのような事物の一つ。事物の関聯は網の目の如く限りなく拡がる。何らかの基準，自然な慣習をもって，或は科学表現の上の必要から事物の単位が作られる。それは星座の如くにである。然し，その境界は不鮮明である。〈鳥〉といえば，その姿，解剖生理，生態，声，飼育法から肉の食品価値，世人の評価その他，鳥に関する通常の関心の範囲を網羅して，その概念意味は成長する。鳥の概念内容は〈時計〉とは多くの事柄を異にもするであろうが，獣とは共通面が沢山ある。〈家〉

の概念はその諸材料，建築法，形，機能，庭，門，塀，中の家族，祖先子孫，人の評価，もそれに関わり，語意は広狭さまざまのまま用いられる。その家の概念は，〈家ならぬもの〉との間に不動の境界を劃せねばならないものでもない。

自我，私，の概念は他我の肉体との区別に始まるが，その肉体に関聯する事物，生理，心理，性格，能力，経歴，資産，地位身分，伴侶，友人，その他，この肉体に関聯する一切より成り，〈非我〉との境界は，知識の課題，関心の如何によって劃されるだけである。姿や皮膚の色は，生物学はこれを自我に属せしめ，心理学はこれを外界と同列に考える。マッハは，自我と非我の境界は不定で，自我は感情的要因によって膨張し収縮する，と論じた（E. Mach: Analyse d. Empfindungen, 9. A., 1922, S. 10f）。概念という点では，自我も日本も，家屋も鶴もその性状に渝りはない。そして事物事象の，他との関聯は，そのとどむ可き限界がないゆえ〝一つの露は宇宙を宿す〟と云える。この宿すは imply（包含）で，mean，意味することである。

16. 性質，property，nature，character. Eigenschaft：一物について陳述される，法則的に関係する事物事象。この関係は各種の形式でありうる。一物の構造部分も，他物との関係も，その性質といえる。金は黄色，比重，貴重，工芸材料，その化学的反応，物性論的構造，みな金の性質。木は燃える，灰になる，木目がある，細胞より成る，工作材料になる，みな木の性質。ピクリン酸は爆発する —— 爆発性，性格も性質，人の気質，才能，情感，などは人の性質。〈性〉＝生来，本来。

17. 可能，possible, probable，möglich，wahrscheinlich：反対命題をも否定しない考え方，反対命題との妥協，またその表現，また，それを適合とする事情。〝風邪で死ぬかも知れぬ〟〝当選するかも知れぬ〟〝太郎のしわざではないか〟〝滅多なことはあるまい〟など。

18. 世界，world，宇宙，universe：worldの原義は〈全生活〉，〈一

期〉〈全人生体験〉。universeは〈ひとまとめ〉。〈世界〉とは一全体，一切合財,〈事物の無限集合〉のこと。〈昆虫の世界（昆虫についての一切),〈数の世界〉〈細菌の世界〉〈三千世界〉〈君の世界〉〈地上の世界〉〈物理学的世界〉〈芸術の世界〉など。

19. もの自体，thing (in) itself，Selbst：区別において成る〈一者〉の理念(考えの型)。(この)時計そのもの，私自体（一全体としての私),トム君自体，日本自体，万有自体（万有の部分でなく，一全体としての万有)，世の推移自体，など。〈自体〉は古来，事物の本体，基体substrate，の如く考えられ，超現象的かつ不変恒常のものとされること少なからず。〈自我〉についても，その概念の諸要素（身体や精神や家族や財貨など）がみな〈私の〉で〈私〉ではないということから,〈自我自体〉は私の肉体や精神現象とは別の，それらの背後にある形而上学的，超経的なる実体なりと考える。そのような〈自我自体 Self〉は〈もの〉の概念についての錯誤であるとせねばならない。

20. 過去，現在，未来　：　実証的な観察すなわち所与の事実という見地からすれば，事物事象は生住異滅する。一つの物は無から有化し，或いは有から無化する。物には未生の状態（まだ無の状態）があり，已滅の状態（過去）がある。すなわち〈まだ無いもの〉〈もう無いもの〉，である。観察において与えられる過去，現在，未来，は事物事象のこのような〈変様〉として具体的なる現実である。それがまた〈時間〉である。仏教史の経量部における過未無体論は過去・未来の非有を云う。事物事象は水が隆起した波の進行の如く，波はつぎつぎに有化し無化して再生のない刹那滅のものである。他方，無化して〈過去〉となった事物事象，また未生の，予想される〈未来〉である事物事象，は概念的に整理され，命題化され，それが組織化される。〈過去の世界〉〈未来の世界〉がそれである。過去の世界の時間的順序が歴史学の基本をなすクロノロジーである。過去や未来の〈世界〉は現在の立場から構成され，その材

料は現在における資料である。それゆえに，歴史学も未来学も，その実質は現在学でもある。それは現在の知識の立場から，改善されつつ変化し発展する。〝石炭紀において自然の法則が現在のそれと異って居たとしても，吾人は法則の恒常を仮定することによってのみ，当時のことを推定するのであるから，到底これを知ることは出来ない〟（H．ポアンカレ，「科学の価値」田辺元訳）。

過去・未来についての世界像を樹てて，その中に現在の事物事象を置けば，現在は映画のフイルムのコマがつぎつぎに映し出されるようなものとなる。仏教史における説一切有部の法体恒有三世実有の論はそのような考え方の一例である（木村泰賢；「小乗仏教論」第二篇）。過去・未来の事象は実証し得ないが，過去の歴史は不動の事実であるかのように主張され，未来は既定のプログラムの如くに語られて，既定の運命が前途に待ちうけていると考えられる。ただ，過去未来は現在における概念像でアウグスチヌの告白録もそれをいう――〝次のことはもう明瞭であって疑いをいわれない。すなわち，未来も過去も存在せず，また，三つの時間すなわち，過去，現在，未来が存在するということも正しくない。それより三つの時間，すなわち過去のものの現在，現在のものの現在，未来のものの現在，が存在する，というほうがおそらく正しいのである〟（第11巻，第20章，服部英次郎訳）。次ぎの文章は正確なる観照ではあるまいか――

〝自分は学生時代に夏休み毎に札幌に帰省した。毎年同じ上野駅で切符を求め，時間表の示す時間に青森行と札をかけた汽車に乗れば，毎年同じ福島，仙台，盛岡を経て青森に達する。此処から汽船で四時間余りを過せば函館になり，更に十二時間の汽車で札幌に着く。そこで父母弟妹に迎えられる。之は平凡な事であるが，此平凡な事が奇妙に不思議に思はれることが屢々であった。

今自分は東京に居る。此時仙台，青森，札幌が果して存在するのであろうか，又此等の間に鉄道線路等があるのであろうか。自分が上野で汽

車に乗り，汽笛がなるという事件につづいて，ゴロゴロガタガタと汽車が音を立て，自分の坐って居る坐席がゆれ，同時に窓外の景色も次第に変り，種々の駅が毎年同じ順序に現れるのは丁度絵巻物を繰りひろげる如くである。絵巻物の小部分づつに目をそそいで順次に一端から他端にと見てゆく場合には，此巻物が既に予めひろげられてある場合と，見るに従って繰りひろげ，見終るに従って巻いてゆく場合と，目にうつる絵については何の相異もない訳である。丁度此様に，福島も仙台も，札幌も自分が汽車に乗って定った時間を経過しない以前から存在するか否かは誰が断定しうるであろう。父母弟妹も，自分が札幌に着いた時はじめてそこに現れ，自分が札幌を去るとき消え失せるものではあるまいか。時々父母の手紙が着く。しかし此手紙を父母の書いた事を誰が保証し得るか。疑は果てしもなく継ぎ継ぎに湧き出て果てしもない"(阿部良夫，「科学雑話」昭和15(岩波)，阿部良夫；物理学者，旧北海タイムス社長，北海道大学理学部にて自然科学史講義を担当，昭和20年没)。

過去，現在，未来については，色々の思考法が可能である。ただ，時間のこのような区別は，所与の全事象についての一つの区別形式で，この三世の内容は概念像，命題組織としていろいろに構成される。事実の現在相は〈現実的 real〉と云われるが，それは刹那滅のものである。一つの楽曲はその僅かな一部分を順次に聴き継ぐのみで，全楽曲は譜面の中にあると云う可きか。譜面は鳴っていない。演奏者の記憶や脳中にあるというべきか。演奏者も亦，その意識の現在において全曲を回想し得るものではない。ただ，演奏者は自分が〈親しい，馴れた楽趣〉を円滑に展開しうることを疑っていないのである。〈世界概念〉も〈世界の現在相〉もこの如きものである。

21. 科学的実在，scientific entity, wissenschaftliche Realität：〈芸術的実在〉を畫画や歌唱，演奏や舞踊など，いわば作品を指す言葉とすれば，〈科学的実在〉は科学の命題やその組織すなわち学問体系，科学的

世界観，のことであろう。また，作品の意図や創作過程あるいは鑑賞を芸術的実在というならば，科学の意図，観察や思考の過程，あるいは，命題や科学体系の理解過程，を科学的実在ということになる。〝科学は実在を探求し……〟など物の本に述べられるが，多くの場合に，その〈実在〉は現象事実のことではなくて，超経験界を意味していたりする。論者は，科学知識をそのようなものの反映また模索として意味ずけようとする。

科学の実際は，法則科学にあっては現象的事物の探索、その諸関係の観察とそれによる法則性の命題の工夫，そして，それらの命題の体系的な整序である。この体系化のためには仮説すなわち理論が構想される。法則の命題も仮定や規約的なものを含むゆえ，科学の世界観は全体として仮説また仮想 Annahme（想定）の性格も負びている。経験科学におけるこれらの命題のため，それぞれの科学は独自に概念を定義している。それらの概念は法則性の見地からの構成で，要素的なもの，複雑なるものなど様々であるが，その様な事物（ものやこと）相互の諸関係を科学は陳述する。ポアンカレは，この〈関係〉こそ知識における〈実在〉で，人間相互の間に伝達され理解される〈客観的〉なるものだと考える（H. ポアンカレ,「科学の価値」）。他我の意識内容は不可経験のものではあるが，知識の交流，会話の成立は，その様な主張を支持すると考える。

〝吾人はもろもろの性質を現実に認識できるのか。このファイルはミドリ色である。ということの意味は，私がファイルの色を他の対象と比べるということである。この，ミドリという性質の点で似ている対象はみな，私はこれをミドリという。私が現実に認識するのは，二つ或いは多くの対象の類似性である。類似性は一つの関係である。吾人が認識できるのは，所詮，もろもろの関係だけである，ということを示唆したのはポアンカレである。もろもろの色，音，形，運動感覚が或る感情価値 Gefühlswert を有することは疑えない。これらの感情価値は然し，認識されるべき現実については何も言明していない。それらは認識を何も伝え

ない。それらは主観的なる附加物である。吾人は，自然科学に携わる場合には特に，再現可能性と伝達可能性というような意味における，一つの厳格なる客観化可能性を要求する。この厳格なる意味において認識可能なるものは，もろもろの〈関係〉あるのみである″（G. Frey : Erkenntnis der Wirklichkeit, 1965, S. 100)。

言語は自他の間，人間相互の間に流通する。という意味は，言語によって人は協同する，ということである。ただ，それは，自他の――その言語に関係する――意識内容が合致したことを直接的に確認させるものではない。ひとは，よしんば他人の脳と自分の脳をつないで，何かの情景や認識，事物の諸関係やそれについての言語表現を体験できたとしても，そして同時に自分の言語表現と他人の発する言語表現が一致したとしても，それは飽くまでも自分の体験であって，他人の体験を観察できたという保証ではない。動物一般における声は，協同を媒介し，他の個体に生理の感応も惹起するが，それが心理の合致かどうかは証明できない。同じように，人間の対話の円滑が認識の形式の自他合致であるのかどうかは直接的には確認され得ない。しかし，それは学問における真理性の欠陥を意味するわけではない。真理性の確認は各人における観察事実とその陳述の間の表現関係の問題だからである。そして荘子は〝有るものを以って無いとすれば，神禹の大聖と雖もこれを訓すことが出来ない″（荘子，斉物篇）という。経験認識はその様な面倒を概ねは知らないが，心霊現象や〈超能力の実験〉を認める人と否認する人の間には，似たような気持はあろうか。然し，学説は万人の合致を誣い難いものである。

22. 確実性，certainty，Gewissheit，Sicherheit：認識の真理性の規範としては明証性 Evidenz の他に確信 Gewissheit が云われる。デカルトは学問的知性の據るべき規範として〈明晰判明 clear and distinct〉を云ったが，その保証としての〝われ思う故にわれあり″は，学問的哲学の基礎となるような命題とは云い難い。デカルトの説明は西洋に伝統

的な形而上学的な思考にまつわられている。

フォルケルトは〝認識論はその根底において，確信 Gewissheit についての学説，確信についての批判である〟という（J. Volkelt：Gewissheit und Wahrheit, 1920, 2.A., S.30)。その説くところでは，確信は端的に生ずるもので，〝確信できぬ ungewiss という経験もまた絶対的な確信体験であり〟，要するに〝直接的に生ずる自覚的確信 Selbstgewissheit が科学の基礎である〟とする。この浩瀚な論著は，結局，記憶や他我認識の場合の確信についても，その直接性をいい，差異や同一，類似，時間および空間，前後，共存，因果，などの〈関係〉についても〈直接的なる，関係の確信 die unmittelbare Beziehungsgewissheit〉をいうことになる。彼のいう〈所与性確信 Gegebenheitsgewissheit〉はすなわち所与の事実であるという確信のことである。

フォルケルトのいう〈確信〉は〝論理学の上の確信の他に，非合理的，直観的なる確信の型もある〟という如く，経験事実を超えた範囲のことにも亘るのである。本論が冒頭にいう明証性は事実の有りのままの観察そして陳述，という自信のことである。明証は現在における事柄で，過去未来の事象や他我の意識内容には及ばない。過去や未来の事象は〈現在における思考〉としてのみ明証的に存する。他我の意識内容も，他我の言語動作についての整合的な推量としての他には，学問的にこれを論じ得ない筈である。

そして，アイスラーが説明する〈明証的〉が実際的である――〝吾人が疑ったり或いは否定したりし得ないものごと，確定 feststeht していて，何度でも主張され，され得，もしくは，せざるを得ないこと，それが gewiss（確か）というものである〟（R. Eisler：哲学辞典, 1922, 2.A.,)。

実証学の立場は，感覚にせよ，表象にせよ，感情にせよ，認識にせよ，事物事象をその観察される所与相において陳述することをその基盤とする。疑われようと疑われまいと，所与の直接相が，実証科学の出発点で

あり，そして学の命題やその体系の真理性を判断せしめる規範，試金石でなくてはならない。

V．哲学について

言葉はその発展史の年輪と共にある。多くの語彙は譬え話ふうに転用されて，語意が発展する。その形式面にも同一性あるに依る。また，思考は寓意や比喩の形で発展する。それで運用も容易である。その譬えは生活から借りられる。生活の基本は，衣食住，他人，労働，加工，性，防衛，愛憎，支配，出産，育児，などで，生体や物体，筋肉活動は日々の大事として親しまれる。多くの思考，そして言葉は，それらのものの譬えを生きる。物体の現象は生物の行動の如く見なされ，表現される。精神や生命が虫や鳥や物体の如く思いなされる。そこでは機能関係が生物の活動や機械の運動の譬えで理解され，説明される。

空間物の特色は分割や相互分離の可能性と各箇独自の集散であるが，非物質的な諸事象，その諸概念が，そのような，相互別個の物体に擬せられる。観念要素が元素の様な離合集散をするかに思いなされる。また諸概念が，物体に擬せられてその相互を分つ固有の境界が問われる。水は流れるが，時間も流れると思いこまれる。普遍と特殊の層次的な関係は，階級秩序の如く思われて，普遍や法則が現象事物を動かし支配するかのように考えられたりして，神は最高普遍だという。形式は事物と不離に存するが，質料と分離されて，工夫や鋳型や設計やプログラムの如く誤解され，質料や物質，また精神の諸現象を制約，統御し，或いは型どるものかのように思いなされる。また，思考は空間，物体，人間に馴染んでいて〈形式form〉といえば，物体や生物体や機械や図形（形figure）のように思われ易い。また，関係は〈動作〉で譬え易いものがあり，形式としての否定関係を恰かも否定動作や，排斥，斗争の如く語る哲学にも多く出合うのである。関係形式を考察し，その実際を捉うる上には，また，科学思想と哲学の学問的な洗練のためには，これらの擬人観，生

霊観，物体観，機械観，空間的思考，などを脱却する注意も必要になる。

哲学といわれる思想の多くは，何らかの概念を実体視 hypostasieren して，万象の根源ないし生成原理として説いている。例えば〈生命〉は生物学の基本概念であるが，それが万象の哲学原理にまで加工される。〈精神〉や〈意識〉は心理学の見地を象徴する概念であるが，万象形成の活動原理とされる。感覚主義の哲学は感覚要素が万象を構成すると唱える。自我や人間も哲学の根本概念の地位を与えられるが，所与の明証的事実としては自我も人間も諸他の事物に伍する現象与件に他ならず，万象の主宰原理や根元とは言い難いはずのものである。近代の唯物論哲学は，物理科学の原理や諸概念を万有の実相の模寫的把握と独断したものである。現代の物理学者たちは，物理科学の経験的基礎について批判的な省察を深めて，物理科学が哲学原理を教えるとは唱えていない。

プラトンは〈形式〉その他の類概念をイデアとして天界にある認識原理と考え，アリストテレスは形式を事物に内在する動的な形成原理とし，神を最高かつ純粋の形式とする。この思想はキリスト教哲学に継承されている。カントは現象界を意識内容とみる立場から，時間と空間を感性の受容形式，因果などの認識形式を悟性の範疇，主観の先天的な形式とする。それゆえ，その認識論は心理学的な理説の趣きを呈する。

認識論は，心理学とその諸概念についてもその構成の方法，その素材（質料）と形式を問うべきものである。本論は〈もの〉とその〈関係形式〉という視点から，万象とその科学知識一般に関する基本的な原則を略述し，併せて，明証性を求める立場から，一般の哲学に見られる若干の概念について，その実証的な意味を問うてみたものである。